共催：薄層屋上緑化技術協会　一般社団法人　緑のまちづくり支援機構

国土交通省・東京都環境局・大阪府環境農林水産部 後援

第12回　屋上緑化WEB講演会報告

第12回屋上緑化講演会は大盛況を持って終了致しました。
参加頂いた皆様（約105名）有難うございました。
以下、簡単にご報告させて頂きます。

■日時：2022年11月18日（金）
13：30～16：50

■開催方式：WEB講演会（Zoomライブ配信）

■進行：

［基調講演］・栗生 明 氏（千葉大学　名誉教授／一般社団法人 緑のまちづくり支援機構　会長）
講演テーマ：「緑と建築の物語」

［講　　演］・塩田 真由美 氏（株式会社アトリエMay　代表取締役）
岡本 明 氏（株式会社たまゆら　法人営業本部　主任）
講演テーマ：「ヨシ刈りからはじまるSDGs」

・霜田 亮祐 氏（千葉大学　大学院園芸学研究院　准教授）
講演テーマ：「文化的景観としての都市の野生」

□ 高橋会長挨拶（薄層屋上緑化技術協会）

薄層屋上緑化システムの仕様が多様化している中で芝生・地被・壁面緑化・自動灌水設備等、幅広い活動を展開している。
昨年より緑のまちづくり支援機構様と定期的な合同会議をうけて、大阪万博での共同技術開発検討などを行ってきた。
昨年よりテーマを「グリーンインフラ」をキーワードとして、少しでも皆様のお役に立ち、業界の活性化に繋がればと思い発信している。

1.「緑と建築の物語」：栗生 明 氏

自然を代表する「緑」、人間の生活や産業に不可欠なインフラである「建築」、そうした自然と人工的なものを繋げる「物語」について、「サピエンス全史」から定義づけた。サピエンス（人間）は他人と協力し、フィクション（物語）のおかげで共有共同する事で生き延びる事が出来たといえる。今回のテーマである「グリーンインフラ」が自然と人、自然と人工を繋ぐ物語として有効であるという事を、栗生氏が過去に携わった博覧会と、事例を通して述べた。1990 年大阪花と緑の博覧会ではピロティ構造の道の上に屋上緑化を作り、1993 年信州博覧会では「喧噪の中の涼気」のテーマを土木構築物のアートで表現した。1996 年東京都市博覧会は残念ながら設計途中で中止となったが、都市の水災害対策の在り方や都市のグリーンインフラの可動性をも示す計画であった。 2000 年浜名湖花博覧会の会場は今もなお緑の浜名公園として大勢の方に愛される広場となった。事例では元々の風景や樹林を残して 1 つの展示とした植村直己さんの冒険館をはじめとして、伊勢神宮、黄島神殿など自然との共生を考えた建築物を紹介した。グリーンインフラという物語を基に社会基盤や生活基盤をより豊かなものにしていって欲しいと想いを伝えた。

2.「ヨシ刈りからはじまるSDGs」：塩田 真由美 氏　岡本 明 氏

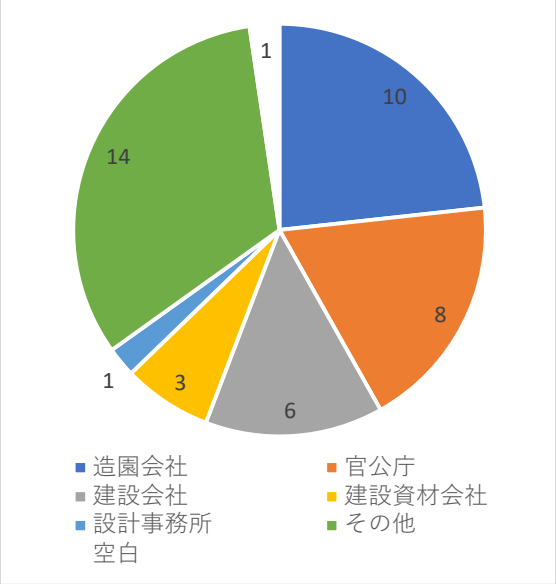
滋賀県と大阪府を流れる淀川の鵜殿に自生するヨシは昔から茅葺屋根や宮内庁雅楽の篳篥のリード等に活用されてきたが、近年では利用されないばかりか、環境保全活動をしないと根腐れをして水質へも悪影響を及ぼしてきている。こうした課題に地域の方と協力して取り組み、ヨシを活用した魅力ある商品を開発する事で、地域の自然を守り、地域の活性化を目指している。ヨシは二酸化炭素の吸収や河川の水質浄化機能、生態系の保全にも役立つ事がわかっている。塩田氏は和紙の個人事業を立ち上げた後、ヨシと出会い、ヨシ紙を軸として「ヨシ」で衣食住全てを作り販売したいという思いがあった。文具やインテリア雑貨、食品を作り、衣類についてはヨシ繊維に加工してヨシ糸を開発した。このヨシ糸を用いてたまゆらの岡本氏と共に製品化を実現した。共同で立ち上げた「世界初のヨシ糸が地域を紡ぐプロジェクト」が日本商工会議所による「地域活性化プロジェクト第一号」にも選ばれて、SDGs の世の中の動きに即していると高い評価を得ている。「ヨシを作る、使う、守る」という持続可能な事業としてヨシ原を守る一連の仕組みの構築が今目指している姿である。

3.「文化的景観としての都市の野生」：霜田 亮祐 氏

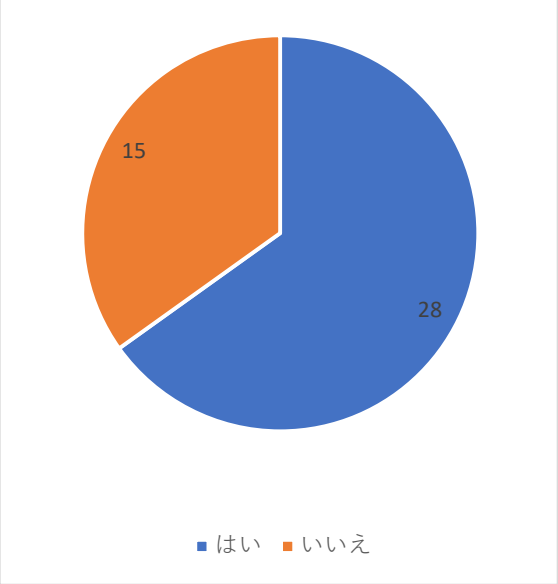
社会課題に対して地域の再生や森林の再生等これからの新たな風景をデザインし、人工的な施設にどのように野生的な環境や風景を取り込み、地域性が感じられるランドスケープを作る事ができるか。関連する実践事例を紹介した。式年遷宮記念せんぐう館という国立公園内の開発事業のランドスケープに携わり、コンセプトや概念ゾーニング、植生・属性調査を行い、建築とランドスケープの連続性を表現した。大阪の北摂霊園ドイツ型樹木葬墓地「木もれ日と星の里」では 100 年という長期的な時間軸の中で樹林の利用を計画した。その他、粗放的かつ持続的な屋上緑化手法の開発も行っており、自然と人工的な環境の狭間に存在するナチュラリスティックガーデンを目指し、実験中である。様々な事例を通して野性的な景観のような場所が人の手を加え、デザインする事で文化的な景観になり得るのではないか。という考えに至った。世界的なコロナパンデミックが自然と都市とを分離させた結果、生態系から孤立したウイルスにより起こったものであるという考察にも触れ、都市空間の中に野性的な生態系が共生できる環境を作っていく事でウイルスが孤立しない環境も作っていけるのではないか。と、文化的景観としての都市の野生についての可能性も示唆した。

第12回 屋上緑化WEB講演会 アンケート結果　　43名回答/105名参加

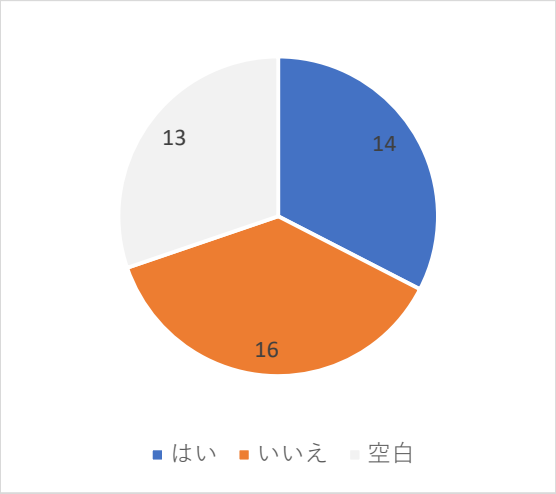
【問1】あなたのご職業



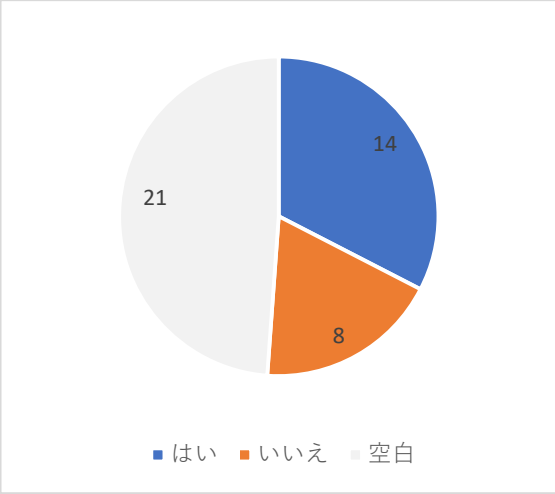
【問2】協会ご存知？



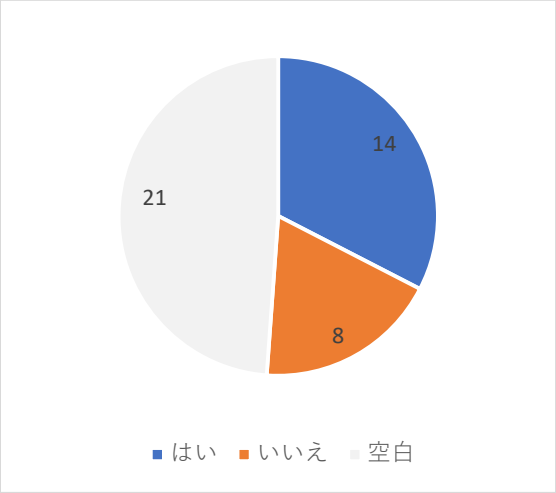
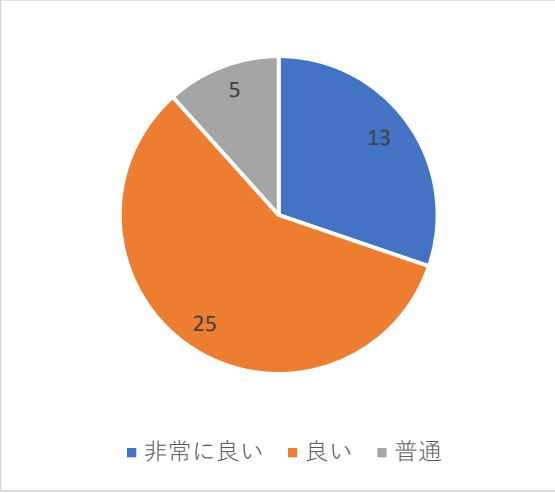
【問3】「11回」開催ご存知？



【問4】過去に講演会参加？



【問5】何で



【問6】ご感想